

批評の機能

ポストモダンの地平

テリー・イーグルトン

大橋洋一 訳

著 者

Terry Eagleton

1943年、英国に生まれる。ケンブリッジ大学で学び、レイモンド・ウィリアムズの指導を受ける。現在、オックスフォード大学ウォッドダム・カレッジの特別研究員およびチューター。今日の英国の文学批評を代表する存在である。

著書：The New Left Church (1966), Shakespeare and Society (1968), Exiles and Emigrés (1970), Criticism and Ideology (1976) [『文芸批評とイデオロギー』岩波現代選書], Marxism and Criticism (1976) [『マルクス主義と文芸批評』国書刊行会], Walter Benjamin, or Towards a Revolutionary Criticism (1981), The Rape of Clarissa (1982) [『クラリッサの凌辱』岩波書店], Literary Theory: An Introduction (1983) [『文学とは何か』岩波書店], Against the Grain (1986) [『批評の政治学』平凡社], William Shakespeare (1986), Saints and Scholars (1987), 他。

訳 者

おお はし よう いち
大 橋 洋 一

1953年、名古屋に生まれる。1976年、東京教育大学文学部英文科卒業。1979年、東京大学大学院人文科学研究科英語英文学専門課程修士課程修了。現在、学習院大学助教授。

訳書：イーグルトン『文学とは何か』、同『クラリッサの凌辱』（以上、岩波書店）、同『批評の政治学』（共訳・平凡社）、バリンダー『SF／稼働する白昼夢』（共訳・勁草書房）、エイベル『メタシアター』（共訳・朝日出版社）、ラム&ウォトソン『ボディ・コード』（共訳・紀伊國屋書店）、他。

批 評 の 機 能

定価1800円

1988年2月15日 第1刷発行©



発行所 株式会社 紀伊國屋書店

東京都新宿区新宿3-17-7
電 話 (354) 0131 (代表)
振替口座 東京 9-125575
出版部 東京都世田谷区桜丘5-38-1
電 話 (439) 0125 (代表)
郵便番号 156

ISBN 4-314-00496-7 C1090
Printed in Japan

印刷 文栄印刷
製 本 三 水 舎

批評の機能

批評の機能
ポストモダンの地平

テリー・イーグルトン

大橋洋一 訳

紀伊國屋書店

Terry Eagleton

THE FUNCTION OF CRITICISM

From *The Spectator* to Post-Structuralism

Copyright © Terry Eagleton 1984

This book is published in Japan by arrangement with
Verso Editions and NLB, London.

わが親愛なる友、
トリルへ

はじめに

私がこの本を書くにいたった動機めいたものを理解していただくには、次のような場面を思い浮べてもらうのがいちばんいい。批評家がいま、あるテーマなり作家なりを選んでその研究に本腰を入れようとしている。ところが突然、この批評家の頭をよぎるのだ——答えに窮する問いが。この研究の意義とは何か？ 自分がいま何かを訴え、影響をあたえ、印象づけようとしている相手は、いったい誰なのか？ 社会全体は批評行為にどんな機能を割りあてているのか？ 批評という制度そのものに疑問がもたれていないときにかぎり、批評家は自信をもつてものを書ける。ところが、ひとたび批評制度に根源的疑問がつきつけられるや、個々の批評行為は根底から揺さぶられ深い自己不信に陥るだろう。だが批評行為は今日でも続けられている。しかも似たところ、昔ながらの自信をいささかも失うことなく。となると、これが何を物語るかはもう明らかだ。つまり批評制度の危機は、いままで深刻に取り沙汰されなかったか、さもなくばあえて目をそらされているかの、いずれかにちがいない。

今日、批評は実質的な社会機能をことごとく喪失している。これが、本書の議論の要となる。批評

の現状とは、文学産業のPR部門か、そうでなければ、もっぱら学術機関アカデミのなかの問題でしかない。批評はいつもこうであつたわけではないし、今日でさえこれが批評のあるべき姿ではないだろう。このことを、英国批評制度の歴史を十八世紀初頭から思いきりかいつまんで辿りながら示そう、というのが私のねらいなのだ。その際、このささやかな試みの糸になってくれるのは、ユルゲン・ハーバーマスが『公共性の構造転換』で最初に発展させた「公共圏」の概念である。むしろ、この概念はいまや激しい論争のまとなっている。たとえば、この概念は理念的モデルなのか、歴史記述なのかが定かでない。この概念には歴史区分の面で重大な問題がある。またハーバーマス自身の仕事のなかでも、この概念は、多くの物議をかもし出した彼の社会主義観と分ちがたく結びついている。「公共圏」とは、ノスタルジーと理想化という含みをどうしても払拭できない概念なのだ。実際それは、「有機体的社会」と同様、はなから解体を余儀なくされたと、そう思えてならないときがよくある。けれども、私はここで理論の正否を問う論争に加わるつもりはない。それより、批評史に光をあてるべくこの概念の諸相を柔軟かつ便宜的に利用してやろう、というのが私の魂胆なのだ。ただ、いうまでもなく、この歴史回顧は政治的にみて決して不偏不党のものではない。私はこの批評史の試みを、問題提起のためのひとつの方便として使っている。支配階級文化の存続を大学内部から支援するという現在の批評のありかた以外に、批評が私たちの時代においてもう一度はたすべき実質的な社会機能はないのか？ これを問いたいのである。

本書執筆に際して、貴重な助言を惜しまれなかった方々、ことに、ペリー・アンダーソン、ジョン・バレル、ニール・ベルトン、ノーマン・フェルティーズ、トリル・モイ、フランシス・マルハーソン、グレアム・ペシュイ、バーナード・シャラットに、私は感謝せねばならない。また、メルボルン大学のテリー・コリッツ、デイヴィッド・ベネットのお二人との心暖まる交友にも、私は多くを負っている。なにしろお二人との語らいのなかで、私は本書のアイディアのいくつかをはじめて開陳できたのだから。

T・E

目次

はじめに 6

I ブルジョワ公共圏の誕生

——十八世紀初頭

11

II 読者層の変容

——十八世紀中期からロマン派時代

39

III 大衆との葛藤

——十九世紀ヴィクトリア朝

61

IV 「アマチュア」から「プロフェッショナル」へ

——『スクルーティニーの矛盾』

95

V 「文学理論」の時代

——新批評からディコンストラクション

119

VI 対抗公共圏の確立に向けて

——批評の未来

153

原注 180

訳注 188

訳者あとがき 200

索引

I ブルジョワ公共圏の誕生

——十八世紀初頭

近代ヨーロッパ批評は、絶対主義国家体制との闘争から誕生した。時は、十七世紀から十八世紀にかけて。絶対主義体制の重圧にあえぐヨーロッパのブルジョワジーは独自の言説空間の開拓に着手する。権威主義的政治の非人道的な命令とは一線を画し、合理的判断と啓蒙的批判によって支えられた言説空間をこしらえようとするのだ。この言説空間を、ユルゲン・ハーバーマスにならって、ブルジョワ「公共圏」(public sphere)と呼ぶことにしよう。それは、一連の社会制度から構成される——クラブ、雑誌、コーヒー・ハウス、定期刊行物などによって。この空間に私人として集う人びとは、身分の上下にとらわれず対等の立場で理性的言説を交換しあう。いきおい、そうしたなかで集団としてのまとまりもでてくるし、そこでの議論が強力な政治的影響力を帯びることにもなる⁽¹⁾。洗練された教養に裏づけられた公論^{パブリック・オピニオン}〔世論〕と、貴族階級のきまぐれな絶対命令^{ディクタム}とがまっこうからぶつかるこの公共圏という透明な空間では、社会的権力、社会的特権、伝統などによって個人の発言し判断する資格が左右されることはもうない。ここでは、すべての人間が普遍的理性の存在を認めあっている。言論の資格は、普遍的理性を有する個人がどの程度まで言説主体として構成され成熟しているかであった。むろん、普遍的理性を絶対視すること自体、絶対主義的立場だと言えなくもない。だが、この立場は、一方的に権威をふりかざす尊大な貴族階級に引導を渡すものだ。ドライデンが述べているよう

に、規則は「權威ではなく良識と健全なる理性に基づき制定される」(2)というわけである。

ピーター・ホーヘンダールはこう書いている。「啓蒙主義の時代における批評の概念は、公共圏制度と切り離して考えることはできない。あらゆる判断は、公衆にむけて発せられるよう仕組まれる。

読者との意志疎通は、このシステムにとって不可欠の一部をなす。読者層とのつながりを保つ

ことが優先されたため、批判的考察に私的人格がはいりこむ余地はない。批評はみずから論争へと開く。批評は読者を説得しようとし、諸者からの論駁を歓迎する。こうして批評は、意見を公的に交換する過程の一部となったのだ。歴史的にみれば、近代的批評概念と、十八世紀初頭におけるリベラルなブルジョワ公共圏の誕生とのあいだには、密接なつながりがある。中産階級が自尊心を手に入れ、その人間的要求を絶対主義国家や階級社会につきつけてゆく道具として、文学は中産階級の自由獲得運動に大いに貢献した。文学談議はかつて、宮廷社会の正当性を誇示すべく貴族のサロンで催される儀式の一部であった。それがいまや、中産階級の政治談議への道をひらく場へと変貌をとげたのである」(3)。この変化が最初に使ったのは英国であると、ホーヘンダールは続ける。だがここでは、英国の特殊事情を考慮する必要がある。英国におけるブルジョワ公共圏は、絶対主義国家内部における抵抗としてではなく、絶対主義国家の存在を是認し、その尾っぽにくつつくようにして地歩を固めていったのだ。いや、十八世紀初頭の英国ブルジョワ公共圏で中心的役割をはたしたステイルの『タトラ』誌とアディソンの『スペクテイター』誌は、放蕩的で公德心を欠いた貴族に対する道徳的批

判や皮肉なあてこすり、大いに沸きかえっていたのではないか。そう言われればたしかにその通りである。けれども、英国の公共圏をつき動かしたのは、階級間の団結を求める衝動であったことも忘れるべきでない。規範を制定し慣習を整備することによって英国のブルジョワジーが求めているのは、その社会的上位者である貴族との歴史的同盟なのだ。たとえばマコーレーはジョゼフ・アディソンのことを「嘲笑を悪用するのではなく善用するやり方を心得ていた」人物と説く。それが意味するのは、アディソンが、伝統的支配階級を頭ごなしに否定するのではなく、やんわりとたしなめるコツを知っていたということだ。マコーレーにしてみれば、ポープやスウィフトとちがって、アディソンは貴族を罵倒して階級間の溝を深めるような愚を犯さなかったとそう言いたいのだろう。ユルゲン・ハーバーマスによれば、公共圏が英国にいち早く誕生したのは、文化的嗜好の問題に古くから関心をよせていた貴族階級とジェントリーが、勃興する商人階級と同じ経済利害を分かちもっていたからである。これは、たとえばフランスの場合とは大きく異なる。つまり、英国では他のどの国よりも、文化的、政治的、経済的関心事が階級間で一致しているのが目立ち、これが英国の特徴となっている。英国の公共圏を特徴づけるのは、その合意性なのだ。たしかに、『タトラ』も『スペクテイター』も新たな支配ブロック形成のための触媒であり、その目的とは、商人階級の教養を育み、放蕩的な貴族階級を高貴な精神の持主に高めることである。日刊の『スペクテイター』、週三回の『タトラ』は、何百という垂流の定期刊行物ともども、王政復活以後の英国に誕生した新たな言説編制——異な